平安期真言教学の研究——東台両密の教学交渉——

大谷欣裕

目次

序論
一　日本密教研究に於ける問題と本研究の目的
二　東密と台密の定義に関する問題
三　本論の構成と検討内容
四　安然に関する基礎的理解
本論
第一章　初期東密教団にみられる台密教学の影響
第一節　問題の所在
第二節　観賢と台密教学の関連性
第三節　真興の成仏論
第四節　仁海撰『[illegible]抄』にみられる安然説の受容態度
第五節　『胎蔵要義』に於ける『教時義』受容の態度
小結
第二章　信証の仏身観にみる台密教学からの影響
第一節　問題の所在
第二節　安然の教主義
第三節　信証の仏身論
第四節　実範の仏身観との類似性
小結
第三章　興教大師覚鑁の両部曼荼羅思想—安然教学の受容による教学形成—
第一節　従来の見解と本章での検討内容
第二節　覚鑁の八大法身観と胎蔵曼荼羅解釈
第三節　金剛界曼荼羅解釈と二輪身説
第四節　『[illegible]界曼荼羅略釈』に於ける両部曼荼羅観
小結
第四章　安然の仏身観の三輪身思想に与えた影響
第一節　従来の研究に対する問題点と本論文での検討内容
第二節　安然教学に於ける二輪身思想
第三節　安然説の後世に与えた影響
小結
第五章　三輪身思想の成立と安然説の関係性
第一節　院政期以前に於ける思想径路
第二節　広沢流に於ける二輪身思想と安然説の影響
第三節　覚鑁・恵什の三輪身説
第四節　実範撰『理趣釈口決鈔』所説の三輪身説
小結
結論

本研究の目的と構成

従来の日本密教研究の全体を概観すると、弘法大師空海（七七四～八三五・以下空海）を中心とした教理研究と、台密を中心とした研究に大別できる。このうち、空海については今も尚、様々な形で論究されているが、空海以降の東密教学に関する研究となれば、興教大師覚鑁（一〇九五～一一四三・以下覚鑁）に関しては厖大な研究成果が確認されるものの、空海以降～平安期に於ける研究については立ち後れていると考えられる。研究が立ち後れた理由としては、以上の三点が挙げられる。

①空海以降の二百余年間の東密教団内では、教学的な発展がなかったと評価され[①]、研究の対象外とされてきた事。

②済暹（一〇二五～一一一五）を筆頭とした院政期の学匠によって東密教学の再興が為されるようになったが、その中心は空海教学の発揚にあったと評されていた。

③こうした評価から、平安期を含めた東密教学は、どこまでいっても空海教学の枠内に留まると認識される要因をもたらした。

一方、台密教学については最近になって本格的な考究が試みられるようになり、そこから判明したのは、台密において形成された教学が後世の東密教学に多大なる影響を与えている事[②]であった。こうした成果から、東台両密の影響関係から日本密教の形成と展開を探るという研究方法が確立され、今日では主流になりつつある。

但し、東密教団が安然（八四一～八八九、一説九一五？）を含む台密教学に接近した要因や、受容態度に注視する研究に関しては未だ為されていない。本研究の意義は、安然を中心とした台密教学からの影響を踏まえた上で、東密教学の特色を見直し、それを洗い直す事にある。

本研究では安然を代表とする台密の仏身論を通じて東密教学の形成を探ったが、成仏論や教判論についても取り上げた。また、論文を五章で構成したが、検討の内容から第一～第三章と、第四・第五章に大別した。第一～三章は主に、『大日経』及び『義釈』を基盤に構築されている安然の仏身論が、東密教学に与えた影響について考察し、また、第四・第五章では、『金剛頂経』系に属する経典や不空（七〇五～七七四）訳『仁王経』系統の経論に顕著な、仏・菩薩・明王の三尊形式による仏身論に対する安然の見解と、後世に与えた影響について考察した。

第一章　初期東密教団にみられる台密教学の影響

空海以降、院政期に至るまでの東密教団に関する従来の研究では、「事相面の充実に明け暮れる反面、教相面は殆ど省みられなかった」と評価されていた。こうした評価を見直す意味で本章では観賢（八五三～九二五）、真興（九三四～一〇〇四）、仁海（九五一～一〇四六）、定深（？～一〇七五～？）の教学を安然との比較から再考し、その特色を明らかにした。

観賢と安然の共通性は、四種法身に関する理解である。この点については後の東密教学でも問題視され、信証（一〇八八～一一四二）の『大日経住心鈔』（以下『住心鈔』）では、安然と観賢の説を一致させて解釈しているが、杲宝（一三〇六～一三六二）の『大日経教主本地加持分別』では、『住心鈔』の説を批判的にみており、杲宝独自の観点から観賢の仏身論を解釈していた。杲宝のこうした態度は、台密教学からの脱却を示していると考えられる。一方、安然教学との共通性や、十巻本『義釈』の借覧を巡って円珍との交渉が行われていた事を勘案すると、東台両密の交渉は遅くとも観賢の段階から認められる事が明らかとなった。

真興については『梵嚕日羅駄覩私記』及び『蓮華胎蔵儀軌解釈』にみられる成仏論を考察した。真興の成仏論は、自受用身の成仏を説く中で、即身成仏と三劫成仏の相反する論理が取り上げられている。すなわち、密教では専ら即身成仏が重要視され、歴劫による成仏は確定しない問題があるが、真興はこれら二種類の成仏論を『摂大乗論釈』所説の「摂在一刹那」によって、即身成仏とは雖も、実は三劫成仏に他ならない事を示している。こうした成仏論は東台両密の影響からではなく、真興独自の密教観によって形成されていると考えられる。

仁海に関しては『[illegible]（曼荼羅）抄』を詳細に検討し、実は安然の『菩提心義抄』を完全に下敷とした書物である事を解明した。しかし『[illegible]抄』は『菩提心義抄』を忠実に引用している訳ではなく、例えば法華円教と真言教の等質性を示唆する教証に関しては削除したり、或いは円仁の『金剛頂経疏』に見られる「大興善寺阿闍梨」を、「不空」に比定するというように、加筆訂正が為されている。このような仁海の学的態度は、「台密への対抗」を標榜していると考えられる。

定深の『胎蔵要義』では、「義に曰く」として安然の『教時義』が随所に引用されており、かつ胎蔵曼荼羅の要点を『教時義』によって把捉している。この事は定深が、胎蔵曼荼羅を解釈するに当たって、『教時義』を指南書として座右に置いていた事を示唆していると考えられる。

第二章　信証の仏身観にみる台密教学からの影響

信証撰『住心鈔』は、院政期に於ける東密教学の実態を知る上で恰好の資料と黙されているが、これまで等閑視されていた。そこで本章では『住心鈔』に展開される仏身論の特色について解明し、『住心鈔』撰述の意図について指摘した。

まず、『義釈』及び安然の教主義について概観すると、安然の仏身論の特色は『大日経』並びに『義釈』の内容を遵守しつつも、更には『不空羂索経』の三身一体説、並びに天台の三身倶体倶用を背景とした四身互具四身説の喧伝にある。この四身互具四身説とは、自性身＝理、受用身＝智、変化身＝用、等流身＝事というように、四種身それぞれに徳性を認めつつ、しかも四種身が相互に連関する

構造となっている。

信証の仏身論は、『秘蔵記』を基盤に構築されており、四種身それぞれに随自・随他の二面性を認めるという重層的な構造となっているが、教主は随自意の自性身とする点に主張の大要がある。しかし、随自意の自性身と他の仏身との関係性を説く上で、安然の四身互具四身説の論理を依用している点から、結果として信証の仏身論は『秘蔵記』と安然説の融合で形成されている事になる。但し、信証は安然の論理を依用しつつも、安然の教主義が自受用身とみなし、痛烈に批判していた。ではなぜこうした複雑な態度を示したのかが問題となるが、その原因は、安然の四身互具四身説の背景思想には、空海の『声字義』が大きく関与しており、安然の空海教学に対する態度が、信証教学に影響を及ぼしたとみる事ができる。

さらに、実範（一〇八九～一一四四）の仏身論を検討した結果、信証と大同小異の内容となっており、実範もやはり安然説からの影響を多分に受けていた。こうした仏身論の相似は頼瑜（一二二六～一三〇四）も着目しており、頼瑜は安然・信証・実範の説は共に、空海の『秘蔵宝鑰』を継承したものと理解している。

『住心鈔』では安然の『教時義』が検討対象とされており、安然の他の文献からの引用は一切確認されない。『教時義』とは安然教学の一大特色である「一仏・一時・一処・一教」の四一教判が表明された文献であるが、これを『住心鈔』のテキスト構成と比較すると、「教主」「説処」「説教」「根性」「教起」の五章のうち、「教主」「説処」「説教」の三章が四一とある種の対応関係にあると考えられる。こうした性格から『住心鈔』は、表面的には『大日経疏』の註釈書という体裁を取りつつも、内実は四一教判の超克を意図して撰述されたと考えられる。

第三章　興教大師覚鑁の両部曼荼羅思想
――安然教学の受容による教学形成――

本章では、覚鑁撰『五重界曼荼羅略釈』を取り上げ、覚鑁の両部曼荼羅思想について検討した。『五重界曼荼羅略釈』の両部曼荼羅思想に対する従来の検討では、『大日経疏』や伝空海撰『秘蔵記』の内容を基に曼荼羅観を形成したといわれている。

ところが、覚鑁の両部曼荼羅観のうち、胎蔵曼荼羅の中台八葉の諸尊を「八大法身」と表現しており、この法身観が安然の『菩提心義抄』にて初めて用いられた事や、両部曼荼羅を四種身で把捉する箇所についても同じく、『教時義』との本文一致や『菩提心義抄』との内容一致が確認された。また、仏身論という視点では、覚鑁の『打聞集』に説かれる二輪身説には、安然教学からの影響が見られる事も併せて指摘した。

更に、覚鑁の曼荼羅思想を示すもう一つの文献である『五重界秘事』を検討した結果、『五重界秘事』の曼荼羅観は、頼瑜の『薄草子口決』の記述から仁海の『五重秘記』と一致する事が判明した。また『五重界秘事』所説の仏身論を「東密の一般的な立場と一致し

ない特異なもので、覚鑁の撰述にも他に見る事は出来ない」と言及した苫米地誠一氏の説[3]も踏まえ、本書の内容から覚鑁の曼荼羅思想を理解するのは、慎重を要する必要がある事を指摘した。

空海教学の徹底化に尽力した事から「真言宗中興の祖」と称される覚鑁であるが、曼荼羅思想を見る限りでは、「空海教学の徹底化」を想定していたとは考えにくく、寧ろ密教教理の中に法華一乗や天台教学をも包摂した台密説の意義付けにその中心があったと考えられる。

第四章　安然の仏身観の三輪身思想に与えた影響

第四、第五章では、三輪身を中心に検討した。三輪身とは、自性輪身（五仏）・正法輪身（五菩薩）・教令輪身（五明王）の三種の仏身を統合した形態を指す。このうち、正法輪と教令輪の二輪に関しては不空訳文献に既出であるが、不空の段階では未だ、五仏と関連付けて説かれてはいない。また、自性輪については不空以後に成立した経典と推される『摂無礙経』にみられるが、『摂無礙経』の自性輪は仏位ではなく、菩薩に該当する。以上の事から三輪身は主に、日本に於いて形成された仏身観と考えられている。日本での成立時期については、覚鑁、もしくはその先匠の頃とみなされており、また、思想的には済遅に片鱗が窺えるとする。

このように、三輪身思想に関する考察はこれまで、東密教学の範疇内で行われてきた。また、安然説に対しては、「二輪身を説くもののにすぎない」という観点から、三輪身の形成径路を探る中で付属的に扱われていた。こうした問題から安然教学に於ける二輪身を考察し、更に安然教学を起点に、三輪身思想を俯瞰する事を目的とした。

安然の諸文献からは、自性輪（身）の語が確認できない為、三輪身が説かれている訳ではない。但し、安然は不空訳文献の段階では明確ではなかった五仏と正法輪・教令輪の二輪身が関連づけられており、五仏所現の二輪身説が形成されていた。更に安然は、仏・菩薩・明王を三密に配当する空海相伝説をも自身の教学に反映させている。

次に、安然教学に於ける二輪身の思想的意義を探ってみると、三尊それぞれが天台の五時教判と対応関係にあり、しかも八万の法門を摂尽する天台の十種三法との一致を標榜していた。つまり、安然の二輪身は円密融会を基盤とする一種の教判的役割を果たすものであり、ひいては一大円教論の具現化を担う思想として位置付けられると考えられる。

安然の二輪身理解が三輪身に与えた影響は、鎌倉期の道範（一一七八～一二五二）や頼瑜に顕著である。道範は、安然が継承した空海相伝説を敷衍して三輪身を形成しており、また、頼瑜も安然の二輪身を継承し、空海相伝説についても「三形輪」と呼称して三輪身を形成していた。このように、後世に至ると安然教学から実際に三輪身を形成する事例が確認されるようになる。

第五章　三輪身思想の成立と安然説の関係性

前章での検討を踏まえ、今度は安然～院政期に於ける三輪身思想の形成径路を検討した。その結果、真興の『胎蔵三部記』では、安然の『瑜祇経疏』にみられる五仏所現の二輪身が引用されている事から、遅くとも真興の段階では、安然の二輪身が依用されている事が明らかとなった。

次に、院政期の中でも、済遅、寛助（一〇五七～一一二五）、信証等の広沢流による諸尊統合の理論をみると、済遅は『胎金秘要鈔』にて安然説を「三身」と理解しており、三輪身の萌芽とも考えられる仏身論を展開していた。また、信証や寛助も安然と同様の二輪身を展開しているが、これら学匠については五壇法という事相的側面から見てゆくと、安然説の受容とその原因が理解できると考えられる。

五壇法は、十世紀中頃に台密の人師によって発案された修法と評されており、五大明王を壇に列ね、五人の阿闍梨が各本尊に伴う修法を行うものであるが、東密の諸師の名もみられる事から、実際は東台両密の阿闍梨による修法であった。更に、五壇法の教学的根拠を『阿娑嚩抄』から探ると、安然の二輪身がその根幹となっていた。

五壇法の修法記録である『五壇法日記』には、済遅や寛助、信証による修法例が確認される事から、恐らく台密の学匠から直接影響を受け、自身の教学に反映させたと考えられる。但し、問題となるのは、寛助や信証は自性輪については何ら言及せず、また、『摂無礙経』の自性輪を継承する『秘蔵記』の内容と安然説を一致させて解釈した済遅自身も、自性輪を仏位と関連付けて解釈していない点である。こうした事情から、院政期の学匠のうち、広沢流からは、三輪身思想を確認する事はできないという可能性を示唆した。

次に、覚鑁及び院政期にみられる三輪身を網羅的にみたところ、覚鑁の三輪身については『曼荼羅沙汰』の内容が基盤となっていると考えられる。しかし、覚鑁の三輪身は覚鑁独自の思想ではなく、あくまでも「奥州東大寺君」（生没年不詳）なる学匠から伝授されている事から、三輪身の成立に、東大寺君が大きく関与していた可能性が考えられる。この東大寺君の教学的特徴を『曼荼羅沙汰』から探ってみると、東寺講堂の五菩薩の中尊を金剛薩埵と解釈する例が確認され、しかもこうした解釈は三輪身と併せて実は小野方、しかも勧修寺流の口決にみられるところである。よって東大寺君は、如何なる人物かは不明ではあるが、少なくとも小野方の密教に精通した人物と推察される。

そこで、実範の『理趣釈口決鈔』や、道宝（一二一四～一二八一）の『理趣釈秘決鈔』といった勧修寺流との関係が深い学匠を取り上げ、三輪身の成立と勧修寺流の因果関係を探った。結果、覚鑁と同時期に当たる実範も三輪に言及している事が判明し、また、道宝も「自宗の定めるところ…」として三輪身を説いていた。この事から勧修寺流と三輪身の関連性が浮き彫りになったとも考えられるが、

安然教学の影響という点については、課題を残す形となった。

まとめと今後の課題

平安期の東密教団に於ける台密教学の受容態度は様々であり、定深、或いは覚鑁のように、安然の文献から直接、自身の教学を構築する例もあれば、仁海のように安然の文献に加筆訂正を加え自身の立場に置き換え、台密への対抗意識を表明する場合もある。また信証、実範のように覚鑁と同時期の学匠とはいえ、安然から多大な影響を受けつつも、一方では痛烈に批判する面も看取される。或いは真興のように、立場上は東密小野方に属するとは雖も、東台両密の立場とは異なる、独自の密教観に立って教学を形成している場合もある。こうした真興の立場は、真言密教の研鑽が南都でも盛んに行われていた事を示す証左として押さえておく必要性がある。

安然教学に於ける仏・菩薩・明王の仏身論は遅くとも真興の段階で受容されており、寛助、信証、済暹、覚鑁に影響を与えた。また、安然の継承した空海相伝説は道範、頼瑜によって三輪身と解釈されるに至る。また、実範や道宝の文献から三輪身と勧修寺流の因果関係が浮き彫りになったと考えられるが、三輪身の成立と、安然説の直接的な関与については事相的側面④も踏まえ今後の課題とする。

総括していえるのは、平安期の東密教団は台密の影響下で教学を形成しているという点である。この事は、安然を代表とする台密諸師の説を、密教を信奉する一学僧の説として非常に珍重していた事を示唆しているとも考えられる。そして、東密教団のこうした態度を、真言教学の形成と展開という大局的見地から概観するならば、東密の学匠もいわば、「安然の後継者」とみなす事も可能かと考えられる。

また、こうした平安期の東密教学が素地としてあったが為に、中世以降の東密教団が教学的独自性を発揮するに至ったと考えられるし、逆に平安期の東密教団の教学的特色を理解しておかなければ、中世以降の東密教学の独自性を解明する事はできないとも考えられる。その意味でも日本密教の研究は今後、初期の東密教学の特色を把捉した上で、進めていく必要があると考えられる。

註

① 那須政隆「十住心の構成について」(『空海―日本名僧論集第三巻―』・吉川弘文館・一九八二年)

② 様々な研究が報告されているが、代表的な論考としては大久保良峻『台密教学の研究』(法藏館・二〇〇四年)や苫米地誠一「平安期真言密教の研究(第一・第二部)」(ノンブル社・二〇〇八年)等が挙げられる。

③ 苫米地誠一「興教大師覚鑁の教主義について②―本地法身と四種法身―」(『仏教文化学会紀要』第一号・一九九二年)

④ 最近の研究では五壇法の対抗策として、東密では五大明王を本尊とした仁王経法が、仁海を起点に修された可能性を示唆する論考がある。(原浩史「東寺講堂五大明王像の造立意図と仁王経法」・『史友』三七・二〇〇五年)そして、東寺講堂及び仁王経法といえば、三輪身思想と密接に関わる仏身論である。あくまでも推測の範疇内

ではあるが、五境法への対抗策として、五大明王を本尊とする仁王経法が成立したのであれば、修法に伴う、教学的側面からの対抗策も取られるはずである。その意味で、安然の二輪身に対抗する形で、三輪身が建立されたという可能性も充分考えられる。もし仮にこの推察が当て嵌まるのであれば、安然からの影響が看取されないのは当然の帰結とも考えられるし、寧ろ東密が教学上での独自性を発揮する最初期の思想の一つとして、三輪身思想を位置付けることも可能かと考えられる。